

都会のカラスは大きい

ワード・コールドマン (33)

レイチェル・バスケット (11)

クラリツサ・バスケット (43)

リーフス・フォレスト (59)

サニー・マイランド (30)

ビル前

カラスの鳴き声

サニーは双眼鏡で回り見ている

リーフスは携帯で電話をしている。

リーフ「ああそうだ。村人全員が共犯か、

ワード・コールドマンによる集団催

眠なのか。もう一度、村人たちに聞

いてくれ」

サニー「リーフスあれを見て」

リーフ「…それと相談があるんだが、相棒

を変えてくれるように上に行つてく

れないか？定年が近くなければ、育

てる自信があるんだがな。これはち

とベイビーすぎる」

サニー、リーフスをガン見

サニー「リーフス警部」

リーフ「ああコールドマンは俺が…」

サニー、リーフスの携帯を取る

リーフ「…」

代わりにリーフスが双眼鏡を覗く

サニー「私たちが見つけ出します」

リーフスは双眼鏡でビルを見る

リーフ「自殺か」

サニー「スケアクロウマウンテン事件の容

疑者は私たちに任せてください」

リーフスはその場でしゃがんでいる

サニー「返します」

リーフ「はいよ。俺も返すよ」

サニー、双眼鏡をのぞく

サニー「見ましたか」

リーフ「サニー、サニー、サニー」

サニー「はい？」

リーフ「サニー、俺が見たのはただの鳥さ。

つまり、バードウォッチングをした

だけだよ」

サニー「あの子はきつと、飛べません」

リーフ「飛べない鳥もいるもんさ」

サニー「助けに行きましょう」

リーフ「…いいかサニー。俺らの仕事は害

鳥駆除だ。ゴホゴホ、自ら死のうと

する鳥を助けるのが、俺らの仕事じ

やあない」

サニー「でも」

※リーフスはしゃがんでいる

リーフ「よっこらせ」

サニー「…」

リーフ「赤ん坊は俺の後ろを歩けばいいん

だよ。クワクワ、つてな。ぐははは、

ゴホゴホ」はけるリーフス

サニーはビルを見てからリーフスを

追いかける

## 2. 二つの部屋

レイチェルとワードが椅子に座つて  
いる。

レイチェル、立ち上がり日記を読み  
始める。

レイチ (吃音) 7月8日。暑いからクーラ  
ーをつけることにしたら、前の入居  
者はタバコを吸う人だったみたいな  
んだ。クーラーから出る風が妙に匂  
う。暑いけど、匂いの方が耐え切れ  
ず、止めようとリモコンの停止ボタ  
ンを押すが、いうことを聞かない。  
前の入居者は、めんどくさがりでも  
あつたらしい。僕は電池を買いに、  
外に出ることにした。あんなに晴れ  
ていたのに雨が降ってきた。これが

コンクリートジャングルならではの  
ゲリラ豪雨なのか。この街の洗礼を  
うけたって事で、気持ちを丸く収め  
ることにする。心なしか、少し涼し  
くなつたしね。さて僕は誰だろう  
か？」

ワード「7月9日。日記を書くのは、これ  
で100回目になる。いい加減この  
やり取りの意図を教えてほしいの。  
アンタがなんでこんなやり取りを好  
むのか、本当に不思議。もともと文  
字を書くのが苦手なのに、利き手で  
もない左で書くのなんて耐えらんない。  
そもそも、アタシでも読むのに  
困難なこの文字を、アンタが読める  
のか心配。…ウソ。心配なんかしな  
いわ。私を心配するアンタなんか心  
配しない。『あのまんまホツ』とい  
てくれればよかったのに』って思う。  
アンタが誰かって考えるのは、もう  
諦めるわ」

コーヒーを飲むワード

レイチ「(吃音) 9月9日。すごいぞレイチ  
エル。僕の田舎町がテレビに映つた  
んだ。君も見たかな？いや、でも見  
ていないことを祈るよ。内容がとて  
も悲惨なんだ。白人警察が一般市民  
を発砲してしまったんだ。僕の田舎  
町が、血塗られたような感覚に陥っ  
てしまった。そろそろこの都会にも  
慣れてきた」

ワード「11月10日。左で文字を書くの  
に違和感が無くなってきた。今では  
もう両利きよ。はじめは『なんで左  
で書かなくちゃいけないの』って思  
つたけど。ママに聞いたら、小さい  
頃は左利きだったみたい。アタシは  
知っていたの？まあいいわ。アタシ  
音読はまだ苦手…。アンタはいいこ  
とだっていうけどママは—」

クラリ「レイチエル。レイチエル。」

レイチ「はい、ママ」

抱きしめる

クラリ「何かしていたの」

レイチ「お、音読よママ」

クラリ「音読？そんなことしなくてもいい  
わ。アタシが喋るとみっともないも  
の。レイチエル、黙っていればいい  
の。黙ってれば、可愛いんだから」

ワード「アンタはいいことだっていうけど、  
ママはみっともないって言ったわ。  
アタシはお人形なの。籠の中のオウ  
ムが寂しくないように作られた、鳥  
のお人形。お人形は外に出れないし  
喋ることもできない」  
インターホンが鳴る。

クラリ「出なくていいわ」

レイチ「で、でも」

インターホン

レイチ「い、いくわ。ハイ」

クラリ「レイチエル…」

ガチャ

サニー「警察です」

レイチ「え、えつとな、なんですか？」

クラリ「レイチエル」

サニー「お母さんいるの？大丈夫？」

レイチ「だ、大丈夫。し、心配症なの、ウ  
チのママ」

チのママ

リーフ「お嬢ちゃん」

レイチ「は、はい」

リーフ「怖がらせてすまないね。簡単な質  
問なんだ。最近、怪しげな人物を見  
なかつたかい」

レイチ「み、見ないわ。アタシ家から出れ  
ないもの」

クラリ「戻って来なさい。レイチエル」

リーフ「そうか、ありがとう」

レイチ「い、いえ」

サニー「ごめんね。早く戻ってあげて」

レイチ 「うん」

バタン

リーフ 「手掛かりなしか」

サニー 「リーフス警部。あの子のお母さん、異常じゃないですか？」

リーフ 「あの子も言ってる。心配症だつて」

サニー 「そうだ、学校は？普通だったら今頃、学校に……」

リーフ 「俺たちには関係ない」

サニー 双眼鏡をのぞく

サニー 「あつ」

リーフ 「サニー」

サニー 「あの子、ビルの上にいる子だ」

リーフ 「そりゃよかった。死んでいなかったわけだ」

サニー 「ええ、でも、また死のうとするかもしれない。もう一度、話を聞きましょう」

リーフ 「クワクワ」

サニー 「……」

リーフ 「サニー、スケアクロウの山にどんなヤツが住んでいたか、知ってるか？」

サニー 「……ええ。リーフスと組む前は、私もスケアクロウマウンテンに住む人たちに聴取してましたから」

リーフ 「ヤツらは、どんな人間だった」

サニー 「普通の一般人でしたが、しいて言えば……」

リーフ 「汚らしかつたか？」

サニー 「いえ、私はそんなことは……」

リーフ 「スケアクロウマウンテンに住むやつは穢れた仕事をする者や犯罪者の集まりで出来た部落。本来、表にでていいヤツじゃないんだ。だがヤツらは、コールドマンによる集団催眠だと虚偽をつき、自ら住む山を爆破した」

サニー 「集団催眠が虚偽だと断定ですか」

リーフ 「……さっきの話に戻るが、ゴホゴホ」

サニー 「どこの話ですか？」

リーフ 「汚らしく見えなかったのなら、お前はどうか見えたんだ？ ウツウンウ」

サニー 「自由に……、自由に見えました」

リーフ 「フハハハハ」

サニー 「……」

リーフ スはけようと歩く。

リーフ 「クワクワ、誰が自由をヤツらにやるか」

暗転

### 3 嘘

※ここでは自分の日記を読む。

レイチ 「十二月二十一日。部屋の中においても寒さに耐えられなくなってきた。毛糸の靴下を履いていたけどすぐ脱いじやった。チクチクするのは苦手。また足が冷えてきたわ。足元から部屋全体に薄い氷が広がっている感じがする。寒さを紛らわすにもするところが無い。傷だらけの本棚はほとんどカラッポ。料理の本と編み物の本が数冊あるけど私が読むような本がないの。ろくに本も読まないから別にいいけど。お人形さんとはもう遊ぶ気にもなれないし。この部屋はともつまらないわ」

ワード 「十二月二十二日。外はすっかり赤と緑のネオンで賑わっている。この街もあまり派手ではないけれどさすがにクリスマスは光に包まれている。一人で歩くには眩しすぎるよ。大きなクリスマスツリーが道の真ん中に置かれている。これは多分、僕の部

屋からでも見られるくらい大きな  
…」

レイチェル、ノートを置き窓の外  
を見る。

クラリ「何か見えるの?」

レイチ「赤と緑のネオン…。大きなクリスマスツリーが見えるわ」

クラリ「ふうん…そう」

クラリツサ、ノートを盗み見る。

レイチ「(鼻歌)」ジングルベル

間

レイチ「ねエ、ママ」

クラリツサ、ノートを置き寝たふりを  
する。

レイチェル、外に出たげにクラリツ  
サを見る。

ワードの電話が鳴る。

ワード「もしもし。やあコーデイ。ハハハ、  
ごめんごめん。生きているよ。うん。  
君は、死んだと思ってたのにかけて  
きたのかい。…そうかい。僕の存在  
が見つかるのも時間の問題か…。い  
や、見つかる前に、僕はこの世から  
いなくなることにするよ。これはオ  
リビアが、僕の前で死んでしまった  
時から決めている事だ。コーデイ、  
僕の事は気にせず、君らは自由に生  
きてくれ。村の皆は頼んだよ。ああ、  
ロンググッドバイ」

レイチ「誰と話していたの?あなたの声、  
いつもよりしんみりとしていたわ」

ワード、口をあげて驚く

レイチ「ああ、ママなら大丈夫。なんだか  
今日は、いつも以上にグッスリ寝て  
いるの」

ワード「クマが治ったみたいだね(意味不  
明な言葉)」

レイチ「…?」

ワード「座って、レイチェル!」

椅子に座るレイチェル

肩に手をまわすワード

ワード「今日はいっぱいお話をしよう。な  
んたって」

レイチ「なんたって?」

ワード「君の言葉が上手くなって!いや、  
練習をちゃんとやってきたんだね」

レイチ「うん。ママに隠れてね」

ワード「もう上出来だよ」

レイチ「そんなに喜んでくれるなんて思わ  
なかったわ」

ワード「こんなに嬉しいことはないよ」

レイチ「そうだ。この前、ウチにカラスが  
来たの。ワードと初めて会ったとき、  
アナタ言ったわよね。カラスも九官  
鳥だから、言葉を教えれば話せるよ  
うになるって」

ワード「そんな事いったかな?」

耳たぶに触れる

レイチ「ワードって本当に嘘つきね…。頑  
張って近づいて話しかけたのに、全  
然言葉を覚えずに飛んで行ったわ」  
ワード「そんなにすぐ覚えられるものじゃ  
ないよ。それに僕をウソツキだって  
言うけど、なんで嘘をついているな  
んて分かるのさ」

レイチェル 立ち上がる

レイチ「絶対に教えないわ」

ワード「ふうん、そうかい」

間

レイチ「私、怖い」

ワード「何がだい?」

レイチェル、ワードに近づく。

レイチ「外に出るのが」

ワード「あんなに高いところから飛び降り  
ようとする君が、何を怖がるんだ  
い」

レイチ 「あれは…！私ね、ママのことで、  
学校でイジメられたの。でもママは  
私の事を好きでいてくれるし、私も  
好き。でもママの事をね、少し嫌い  
になってしまった自分に気づいたの  
…」

ワード 「翼のバランスが悪くなって、飛べ  
なくなっちゃったんだね」

レイチ 「…」

ワード 「もう一度座って。目を瞑り、想像  
するんだ」

ワードはレイチエルの後ろに立ち、頭に手  
をかざす

レイチ 「ねえワード、知ってる？」

ワード 「ん？」

レイチ 「アナタが来る前に見たニュースな  
んだけど」

ワード 「そんな話いいから」

レイチ 「ううん、いま話さないとダメな気  
がする」

ワードは姿勢を変えてレイチエルの  
話を聞く

ワード 「…話して」

レイチ 「アナタが来る前の話よ。北部の方  
にある、スケアクロウっていう山を  
知ってる？その頂上には人がいっ  
ぱい住む村があったの。でもある日、  
山は爆発した。村の人はなぜかみん  
な避難してて誰も死人は出てないっ  
て。ニュースでそれを見て良かった  
って思ったの。…その日の夜、何故  
か私はその村の住人で、一人残され  
て爆発に巻き込まれる夢を見たの。  
すごく怖ったけど、誰も話す人がい  
なくて……」

ワード 「大丈夫…。アレは最初から誰も死  
ぬ計画じゃないんだ」

レイチ 「え？」

バン (扉が開く)

クラリ 「レイチエル」

レイチ 「ママ？」

クラリ 「杖をついて必死に歩く  
私の娘を洗脳するのはやめて」

ワード 「洗脳だなんて、まさか」

警察二人来る

リーフ 「ワード・コールドマン。やつと会  
えたな」

サニー 「ワード・コールドマン。あなたを  
スケアクロウマウンテン爆破の容疑、  
及び村人の集団催眠の容疑で逮捕し  
ます」

手錠をかけられるワード

レイチエルを抱きしめるクラリッサ

クラリ 「レイチエル」

レイチ 「ママ、なんで」

間

ワード 「心配しないでほしい。娘さんには  
何もしていかない」

クラリ 「心配するわよ！アナタだって『き  
つと戻ってくる』と祈って、鳥カゴ  
からオウムを放すなんてことしない  
でしょ」

レイチ 「ママ。私、ママの事大好きよ」

クラリ 「レイチエル、アナタ…」

レイチ 「私、ママといっぱいお話したい  
の」

泣くクラリッサ

クラリ 「あなたが飛び方を教えてくれたの  
ね…」

リーフ 「…行くぞ。もうお前は、俺から逃  
げることとはできないからな」

レイチ 「ううん、戻ってくる。ワードは戻  
ってくる…。そうよね…？」

リーフ 「行くぞ」

ワード 「…ああ。戻ってくる」

間

耳たぶに触れるワード

(手錠してるからムリ説)

レイチ 「どうして、こんな時までウソをつくのよ…」

#### 4 警察署

レイチエルは一人で座って待ってる

サニー 「ごめんなさい。お待たせしました」

レイチ 「ううん。おじいさんはいないの？」

サニー 「おじいさん？…リーフス警部は今日お休みなの」

リーフ 「クワクワ：ゲホゲホ」

サニー 「リーフス」

リーフ 「誰が休むか。時間がないんだよ。

コールドマンは何も話さない。彼女から何かを聞き出すしかない」

レイチ 「何？いまの『クワクワ』って（こそこそ）」

サニー 「俺について来いって意味です（こそこそ）」

リーフ 「時間がないんだ」

サニー 「じゃあ始めます。まずこの日記。

この日記にはウンがあります。アナタとコールドマンが、出会ってすぐ始めたのですよね？」

レイチ 「うん」

サニー 「9月9日。コールドマンの日記で『白人警察が一般市民に発砲した事件が故郷で起きた』と書いていますが、これはこの時点ではおかしな事です。コールドマンの故郷は、このときもう無いんですから」

リーフ 「ああ。コールドマンの故郷は、ヤツ自身が爆破をしたからな。革命かなにか知らないが、この国が隠していたことが一つ、その村人自身の手で明るみに出ちゃったってわけだ」

間

レイチ 「自由になったのね」

レイチエル、立ち上がる。

リーフ 「…」

サニーとリーフス、目を合わせる

レイチエル、外に出る

サニー 「レイチエル」

リーフ 「ゲホゴホゲホゴホ、なアサニー」

サニー 「…」

リーフ 「アレがお前の言っていた、自由になった顔ってやつか」

リーフス、顔をおさえる。死にそうなりリーフス

サニー 「リーフス警部」

リーフ 「ゲホゴホゲホゴホ」

サニー 「私、天国までは一緒にいけませんよ」

リーフ 「フハハハ。天国か。だからお前はベイビーなんだよ」

#### 5 屋上

舞台の淵でボーっとするレイチエル。上着をきたワードが来る。

ワード 「そんな恰好で寒くないの？」

首を縦に一回振ろうとするが、横に振るレイチエル

ワード 「きみ話せないのかい？」

口を開けるが話さないレイチエル  
カラスが鳴く

ワード 「カラス！知ってるかい？カラスも九官鳥の仲間でさ。あ、オウムとかの仲間で、言葉を教えてあげれば覚えるんだってさ」

レイチ 「…」

ワード 「…？」

レイチ 「わ、わたし、話すの、に、苦手なの」

ワード 「そうかいここで何をしていたの？まさか」

風が吹く

レイチ 「わ、私、死ねない…」

ワード、上着を脱ぎレイチエルに着  
せる。

レイチ 「…!!」

ワード 「死ぬ前に、僕の夢を叶えてくれな  
いか？」

レイチエル 「…な、なにアンタの夢って」

ワード 「交換日記」

さりげなく耳たぶに触れる